

都城市内遺跡 12

- *The Sites excavated in Miyakonojō City (12th)* -

2019

都城市教育委員会

序

本書は、都城市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。各種開発に対し埋蔵文化財の保護目的に行なった試掘・確認調査、遺跡の範囲確認調査の記録を報告しています。

この報告書が文化財行政の一資料としてだけではなく、学校教育・生涯学習の場などで広く活用され、地域の歴史を知る手掛かりとして活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、多大なる御協力を賜りました各関係機関、地域の皆様に対し深く感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

都城市教育委員会
教育長 児玉晴男

例言

1. 本書は、都城市が平成 30 年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金及び宮崎県埋蔵文化財緊急調査補助金を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 補助事業の事業主体は都城市、調査主体は都城市教育委員会である。

3. 調査の目的は、都城市内の各種開発予定地における埋蔵文化財の有無及び遺存状況の確認、遺跡の範囲確認である。

4. 本書では、平成 30 年度実施の試掘・確認調査のうち、補助事業として実施した 12 件、平成 3 年度に実施した試掘調査 1 件の概要を報告している。

5. 現場における記録写真の撮影及びトレチ配置図・土層断面図の作成、製図、調査概要の作成は、各調査担当者が行った。

6. 出土遺物の実測は、文化財課嘱託外山亞紀子及び整理作業員が行い、製図は外山・同主任主事原栄子・同副主幹近沢恒典が行った。

7. 本書の編集は、各担当者が作成した調査概要をもとに近沢が中心となって行った。

8. 現場における測量には遺跡調査システム「Site Xross」、本書に使用した図面の製図・編集には「Adobe Illustrator CC」・「Adobe InDesign CC」を使用している。

9. 本書の調査区位置図に示している「過年度調査地点」は、本年度以前に試掘調査・確認調査・記録保存を目的とする発掘調査のいずれかを実施した地点である。

10. 出土遺物及び各種記録類は、都城市教育委員会で保管している。

目 次

1. 試掘・確認調査の概要	1
2. 下長飯城ヶ尾遺跡	5
3. 田谷・尻枝遺跡	6
4. 遺跡枠外（沖水・志和池・庄内地区公民館）	8
5. 遺跡枠外（花木第3団地）	10
6. 八幡城遺跡	11
7. 白拍子遺跡	15
8. 宮崎県指定史跡 高城町古墳（19号）	17
9. 都城跡（中之城）	20
10. 犬王遺跡	21
11. 遺跡枠外（下川東四丁目）	22
12. 遺跡枠外（都城西飛行場跡）	24
13. 郡元西原遺跡範囲確認調査	25
14. 切畑第3遺跡	35
報告書抄録	37



1. 試掘・確認調査の概要

都城盆地は九州南部内陸部にあって、霧島火山群の東南のふもと、宮崎県南西部から鹿児島県北東部にかけて広がる。その起源は列島形成時の陥没帯とされる。基盤層は四万十累層群とされ、近隣火山群の強い影響の下、シラス台地などの火山噴出物起源の地形形成が発達している。南北に細長い盆地の周縁には標高400m程度の山地が連なり、南のみが大隅半島にむけて開口する。四方より流入する河川群は、盆地を南北に貫流する大淀川へと収束されたのち、北緯の山地帯を抜け宮崎平野へと至る。内部地形は大淀川を境に西側のシラス台地、東の扇状地性の低位段丘に大別される。

都城市は東西25km、南北35km、面積約650平方km、周縁山地を含む盆地の大半を占めている。人口規模は約16万人、中心的な市街地は盆地底南部の扇状地面に形成されている。

都城市内における「周知の埋蔵文化財包蔵地」は、山間部を除く各地形面にまんべんなく分布するが、大淀川やその支流沿いの河岸段丘面、台地縁部、開析扇状地の側端部における分布密度が高い。また、九州南部域では霧島や桜島などの火山群から噴出した火山灰が多く分布しており、遺跡調査の際の指標として利用されている。都城市内でも複数の火山灰層が確認できるが、目視同定が可能な次の6種が試掘・確認調査の際に多く利用される。霧島新燃岳享保軽石(Kr-Sm)・霧島火山新燃岳起源・1717)。桜島3テフラ(Sz-3・桜島文明軽石・桜島起源・1470年代・土層説明では白色軽石・灰白色軽石と記載)。霧島御池軽石(Kr-M・霧島火山御池起源・約4,600年前・土層説明では黄色軽石・黄橙色軽石と記載)。鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah・鬼界カルデラ起源・約6,600年前)。桜島11テフラ(Sz-11・桜島起源・約8,600年前)。桜島薩摩テフラ(Sz-S・桜島起源・約12,800年前)^①。

平成30年度、民間事業に伴う埋蔵文化財の照会件数は440地点(集計数値は平成31年2月17日時点。以下同様)の記録が残り、公共事業に関しては府内の事業調査にて144事業が把握される。前年度と比較し、民間事業は30件程度の増加、公共事業はほぼ同規模となっている。

試掘・確認調査は民間事業において70地点、公共事業では33地点の調査を実施した。民間事業では個人住宅や宅地造成、太陽光発電施設、畜舎建設など多岐にわたり、公共事業では道路拡幅、農業基盤整備事業、公有地売却、遺跡範囲確認などが主体となる。これらの試掘・確認調査のうち、31件を国・県の補助事業として実施した。

文化財保護法に基づく発掘届出(文化財保護法第93条関係。以後、法と略記)は87件、発掘通知(法第94条関係)は23件を宮崎県教育委員会へ進達した。宮崎県教育委員会からの通知内訳は、記録保存のための発掘調査8件、工事立会い44件、慎重工事53件、処理中2件、事後提出に対する指導3件である。発掘調査に関しては、都城市教育委員会が主体となる調査が4件(1件は平成29年度からの継続)、宮崎県埋蔵文化財センターが主体となった調査が5件である。

切畑第3遺跡は、平成3年7月に市道新設に伴って実施した試掘調査である。この事業は現在まで未報告となっていたが、青花磁器瓶の出土など、都城盆地の中世における重要な資料であるため、本書にて合わせて概要を報告する。

【調査組織】調査主体 都城市教育委員会

教育長	兒玉晴男
教育部長	栗山一孝
文化財課長	武田浩明
副課長	栗畠光博
副主幹	栗山葉子 近沢恒典
調査担当	栗畠光博 栗山葉子 近沢恒典 加賀淳一 中園剛史 原栄子 福添暁久 下田代清海 外山亞紀子 早瀬航
庶務	木下真由美

1) 早田勉。2006。「8.4都城盆地とその周辺に分布するテフラ(火山灰)」。『都城市史 資料編 考古』。都城市。

2) テフラの年代は1)の曆年較正年代を参考とした。

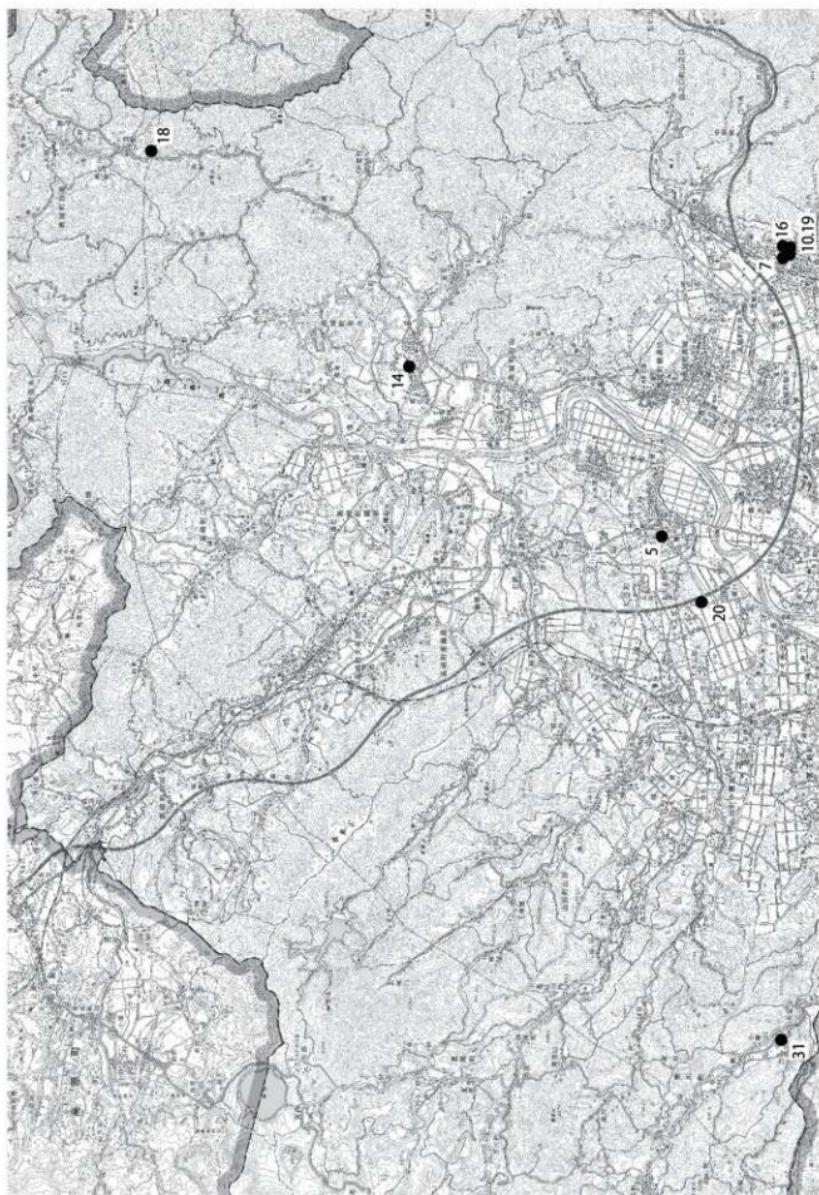


図1. 試掘・確認調査地点(No.は表1と一致)

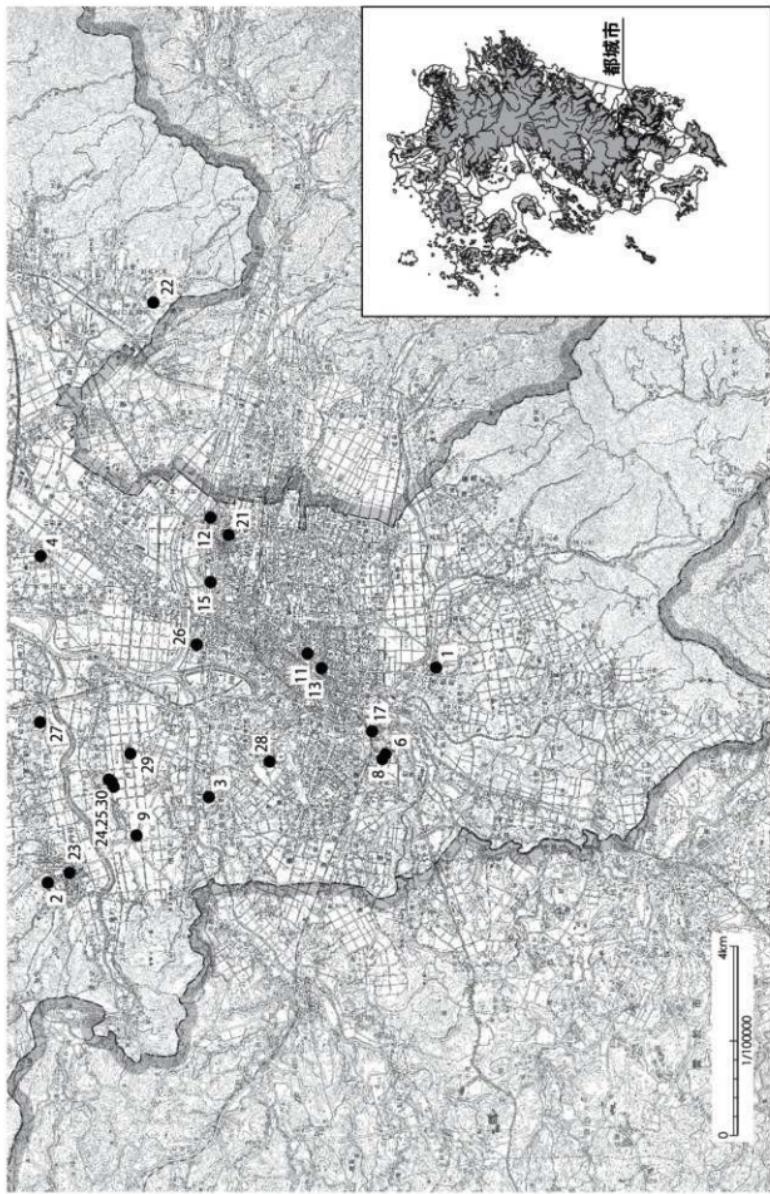


表 1. 試掘・確認調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	調査期間	主な遺構・遺物	備考
1	下長島城ケ尾遺跡	下長島町 703	個人住宅	4/5	古代	土師器
2	安永油路	庄内町 13286	備室開発(畜舎)	4/16-5/1	中世	溝状溝槽・柱穴
3	田谷・夙枝遺跡	南條市町 4045-1 ほか	宅地造成	4/25	共生	周溝状溝槽
4	通路跡外(神代地区公園)	太郎方町 1840-2	その他建物(公民館)	4/27	なし	なし
5	通路跡外(志和地区公民館)	上水流域 1536 ほか	その他建物(公民館)	4/27	なし	なし
6	通路(ノ)上遺跡	鷲島町 937-13	個人住宅	5/9	中世	溝状溝槽・白磁片
7	通路跡外(花木第3地区)	山之町花木 2405-3	街容住宅	5/16-17・29	縄文	土器片
8	八幡城遺跡	五十町 1092 ほか	宅地造成・個人住宅	5/24-25	中世・近世	溝状溝槽・土師器片・近世鉢形
9	鞍の原遺跡(第2地点)	乙房町 2862 ほか	農業基盤整備事業(土地造成)	6/22	なし	なし
10	慶元元年1遺跡	山之町花木 2443-1	個人住宅	6/27	中世	溝状溝槽
11	中町遺跡	中町 77	その他開発(公有財産部分)	7/12	なし	なし
12	白折子遺跡	藤元町 2688-3 ほか	その他開発(不動産鑑定)	8/1	中世・近世	溝状溝槽・中世・近世陶磁器
13	通路跡外(上町)	上町 2360-6 ほか	店舗	8/9	近世・近代	不明遺構・陶磁器片
14	高城19号墳	高城町有水 2833-2	填丘保全	8/16-23	古墳	埴輪・須恵器片
15	松原塙区遺跡群	元三丁目 15-12	集合住宅	9/7	中世	土坑・柱穴・土師器片
16	慶元元年第1遺跡(第2地区)	山之町花木 2472-1	その他開発(太陽光発電施設)	9/10	縄文・弥生	土器片
17	高城(中之城)	高城町 863-1 ほか	その他開発(不動産鑑定)	9/11	なし	なし
18	御野第3遺跡	高城町四家 1838-1 ほか	農業開発(畜舎)	9/25-26	縄文	埴輪
19	慶元元年第3地区	山之町花木 2499-5 ほか	その他開発(公有財産部分)	10/4	縄文・弥生・古代	土器片
20	森原町遺跡	野々美谷町 3208-3 ほか	農業開発(畜舎)	10/22-23	中世	溝状溝槽
21	慶元西町遺跡	藤元町 3337-3 ほか	道路範囲確認	10/29-12/25	古代・中世	人形埴輪・須恵器片・馬頭・日出・人形埴輪・須恵器片・馬頭・日出
22	大王遺跡	山之町花木 1483-2 ほか	農業基盤整備事業(細筋の小事業)	11/27	縄文・古代	柱穴・土器片
23	通路跡外(庄内地地区公園)	庄内町 12651-1 ほか	その他建物(公民館)	11/26-30	なし	なし
24	上野原第1遺跡	乙房町 2303-1 ほか	農業基盤整備事業(土地造成)	12/6	なし	なし
25	上野原第3遺跡(第3地区)	乙房町 2313-2 ほか	農業基盤整備事業(土地造成)	12/6	なし	なし
26	通路跡外(下川東四丁目)	下川東四丁目 40337-3 ほか	公園	12/12-13	古代・中世	土器片・須恵器片
27	松元遺跡	志比町 5015-7	その他建物(倉庫)	12/17-18	古代	土師器片
28	通路跡外(藤原西側防護林)	乙房町 7427	道路	12/25	なし	なし
29	上野原第2遺跡	乙房町 2331-1 ほか	農業基盤整備事業(土地造成)	2/7	なし	なし
30	上野原第1遺跡(第2地区)	乙房町 2405-3 ほか	農業基盤整備事業(土地造成)	2/27	なし	なし
31	切妻窓3遺跡	美川町	道路	1991.7.16-20	なし	なし
						工事中に瓦器類発見

2. 下長飯城ヶ尾遺跡

所在地 下長飯町 703

担当者 乗畠光博・下田代清海・

調査原因 個人住宅

外山亜紀子

調査期間 2018.4.5 (再確認: 5.6)

調査後の措置 工事立会

調査面積 1.4m² (再確認: 2.1m²)

位置と環境 開発予定地は盆地底南縁に広がるシラス台地群(梅北台地)の北縁に位置し、萩原川と梅北川に開析された河岸段丘上に立地している。現況は宅地・畑地である。

調査の結果 トレンチ2箇所を設定し、確認調査では人力のみ、再確認調査では重機・人力にて掘り下げて地下の状況を確認した。

基本的な層序は現耕作土(1・2層)、黒褐色土(旧耕作土・3層)、黒色土(4・5層)、霧島御池軽石(6層)となる。

確認調査・再確認調査・工事立会において、4層上半部より、土師器壺・高台付碗・甕・須恵器等、多くの遺物が出土した。6層で遺構検出を実施したが、遺構は確認されなかった。1~3は土師器高台付碗である。4・5は土師器壺底部で底部ヘラ切り離しである。5はいわゆる円盤高台である。9世紀後半から10世紀初頭の時期が考えられる¹⁾。

以上の結果より、開発予定地には平安時代前期を中心とする遺跡が良好な状態で存在している可能性が高いと判断した。

1) 近沢恒典, 2011.「都城盆地の古代土師器の編年について」『平成23年度埋蔵文化財担当専門職員研修会・資料集』、宮崎県埋蔵文化財センター



図1. 調査区位置



図2. トレンチ配置

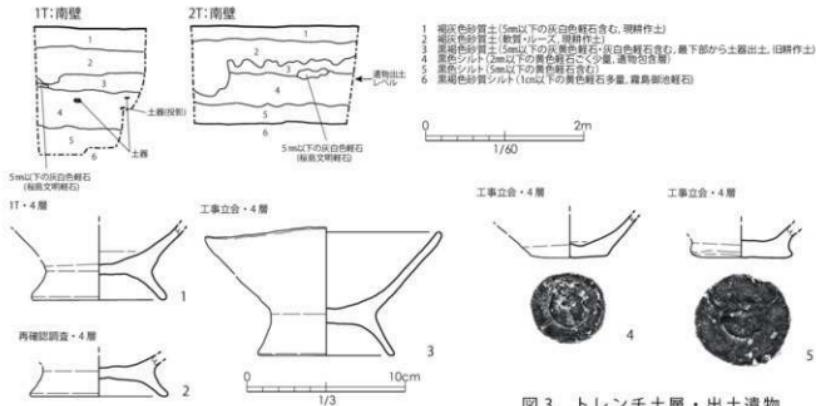


図3. トレンチ土層・出土遺物

3. 田谷・尻枝遺跡

所在地 南横市町 4045-1 ほか
調査原因 宅地造成
調査期間 2018.4.24

調査面積 43m²
担当者 近沢恒典・下田代清海
調査後の措置 工事立会

位置と環境 開発予定地は盆地南西部に広がる成層シラス台地面（蓑原台地）の北縁部に位置し、横市川右岸の河岸段丘へと続く台地面の端部に立地している。現況は既存住宅の撤去と樹木を伐採したあと荒地の状態であった。2017年度に実施した南側隣接地の調査では、開発予定地の一部にて弥生時代の遺物包含層を確認している。

調査の結果 トレンチ6箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土(1層)、黒褐色土(2層)、黒褐色土(3・4層)、霧島御池軽石(5・6層)となる。遺構検出は4～5層で実施した。

1T、3T～6Tでは遺構・遺物は確認されなかった。全体的に竹根などの生物擾乱が進行していた。

2Tでは北～西へと緩やかな円弧状の平面形の浅い溝状遺構(ST1)を検出した。断面形状は緩やかなU字状であり、検出面からの深さは20cm程度と非常に浅い。2Tは表土直下が検出面である5層となっており、上位の削平が考えられる。

溝内の3箇所から弥生土器片がまとめて出土した。いずれも底面より10cm程度高いレベルである。出土位置のまとまり内で接合が進み、1は完形まで接合した。1は小型壺である。体部の張りと頸部の屈曲は弱く、口縁部は外方に向かってゆるやかに開く。明確な脚台がつく。内外面ハケ目調整である。口径21.6cm、底径5.2cm、器高21cm。2は壺である。体部から肩部にかけて緩やかにすぼまり、頸部で屈曲し口縁部は短く外反する。口径15cm。3は刻み目突帯のつく甕口縁部である。4は脚台のつく甕底部である。1は加賀氏分類¹⁾の甕D3、3は甕C2(中溝式)と考えられる。遺構の形状と出土遺物より、弥生時代中期後半～後期初頭の周溝状遺構と考えられた。

以上の点より、開発予定地には2T周辺を中心には弥生時代の遺跡が存在している可能性が高いと判断した。

1) 加賀淳一。2014。「郡城盆地における弥生時代中期から後期前葉の土器様相」。『Archaeology From the South II 新田栄治先生追憶記念論文集』新田栄治先生追憶記念事業会



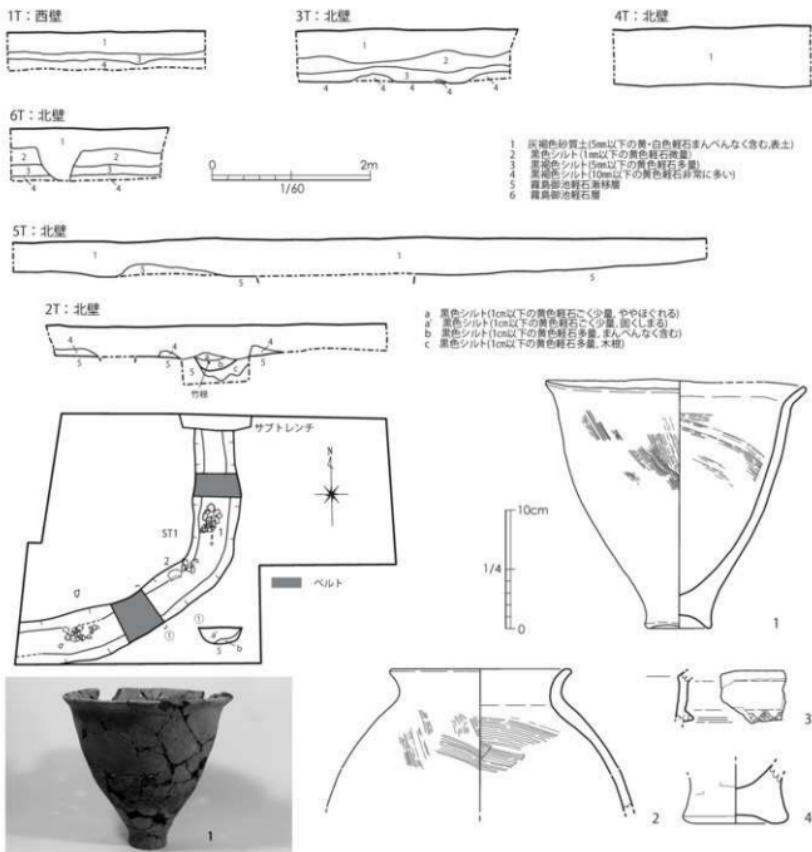
図1. 調査区位置



図2. トレンチ配置



図版1. 2T: ST1(南東から)



図版 2. 2T: ST1・出土遺物

図版 3. トレンチ土層・平面・出土遺物



図版 3. 2T: ST1・土器 1 出土状況



図版 4. 2T: ST1・土器 2 出土状況

4. 遺跡枠外（沖水・志和池・庄内地区公民館）

所在地	沖水 太郎坊町 1840-2 ほか	調査面積	沖水 4m ²
	志和池 上水流町 1536 ほか		志和池 2m ²
	庄内 庄内町 12651-1 ほか		庄内 12m ²
調査原因	地区公民館建設	担当者	加賀淳一・原栄子
調査期間	沖水 2018.4.27 志和池 2018.4.27 庄内 2018.11.26~30	調査後の措置	慎重工事

沖水地区公民館 開発予定地は盆地底北半に広がる開析扇状地面（高木原扇状地）の中央に位置している。旧北消防署跡地である。トレンチ1箇所を設定し、重機・人力で掘り下げて地下の状況を確認した。層序は造成土(1・2層)、黒褐色土(3・4層)、にぶい黄橙色土(5層)、砂礫層(6層)となる。6層は河川作用に伴う堆積である。いずれの層においても遺構・遺物は確認されず、開発予定地に遺跡が存在する可能性は低いと判断した。

志和池地区公民館 開発予定地は盆地北縁西側に広がるシラス台地面（谷頭台地）のほぼ中央に位置している。現志和池地区公民館と志和池福祉センターの敷地内である。トレンチ1箇所を設定し、人力で掘り下げて地下の状況を確認した。

層序は造成土(1・2層)、灰褐色～黒褐色土(3～5層)となる。いずれの層においても遺構・遺物は確認されなかった。また、通常の台地上の土層堆積と比較して4・5層の堆積が厚く、浅い谷状の旧地形が考えられた。以上の点より、開発予定地に遺跡が存在する可能性は低いと判断した。

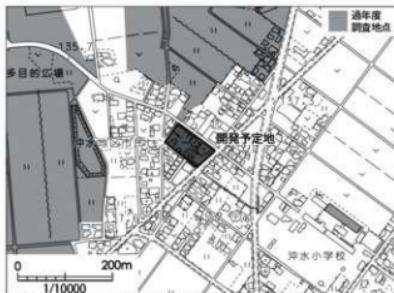


図1. 調査区位置（沖水地区公民館）



図2. トレンチ配置（沖水地区公民館）



図3. 調査区位置（志和池地区公民館）



図4. トレンチ配置（志和池地区公民館）

庄内地区公民館 開発予定地は、盆地北西部、庄内川左岸に展開する河岸段丘面（庄内川段丘群）のほぼ中央に位置している。現庄内地区公民館の敷地内である。トレーナー3箇所を設定し、アスファルトをカッターで切断したのち、重機・人力で掘り下げて地下の状況を確認した。

層序はアスファルト・造成土（1～3層）、黒褐色土（4～6層）、霧島御池軽石（7層）、黒色土（8層）、鬼界アカホヤ火山灰（9・10層）、黒色土（11・12層）、にぶい黄褐色土層（13～15層）となる。1T・2Tは造成土が厚く、現地表面下2mを越えても7層に達しなかった。逆に3Tでは7層以上が削平されていて、14層～15層上面にて数点の焼礫が出土した。なお、北に50mのコミュニティバス車庫予定地（4T）でも1T・2Tと同様な堆積が確認された。以上の点より、開発予定地の旧地形としては、西→東へ大きく下る谷地形が考えられ、良好な遺跡が存在する可能性は低いと判断した。

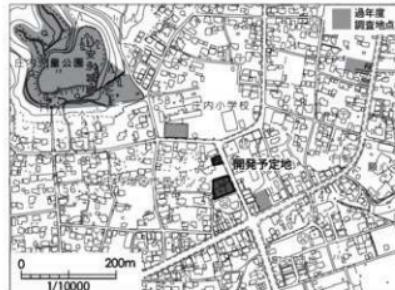
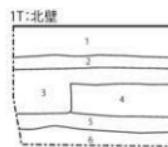


図5. 調査区位置（庄内地区公民館）



図6. トレーナー配置（庄内地区公民館）

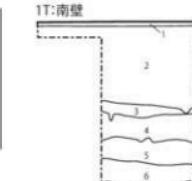
沖水地区公民館



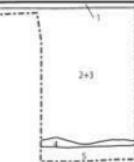
志和池地区公民館



庄内地区公民館



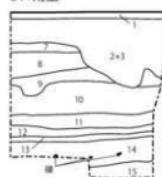
2T: 北壁



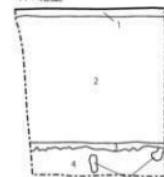
[沖水地区公民館]

1. 黒褐色土・黒褐色砂質土・黒色粘質土（黑色粘質土と黄土混在）
 2. 黒褐色シルト（透成土）
 3. 黒褐色砂質シルト（白色軽石少量混入）
 4. 黒褐色粘質シルト
 5. にじみ、黒褐色シルト（透成土）
 6. 黒褐色シルト（透成土・黄褐色軽石ブロック混入）
- [志和池地区公民館]
1. 黒褐色土・黒褐色砂質土・黒色粘質土（透成土）
 2. 黒褐色シルト（透成土）
 3. 黒褐色砂質シルト（黑色軽石ブロック混入、造成土）
 4. 黒褐色粘質シルト
 5. 黒褐色砂質シルト（黄色軽石をまんべんなく含む）
 6. 黒褐色シルト（5mm以下の黄色軽石4層より多い）
- [庄内地区公民館]
- 1～3T
 1. 黄褐色シルト
 2. オリーブ緑色砂質土＋シラス＋礫・碎石（透成土）
 3. 砂質土（5mm以下）の黄色軽石多量、オリーブ緑色土ブロック含む、造成土）
 4. 黒褐色シルト（1mm以下）の黄色軽石多量、透成土）
 5. 黒褐色シルト（1mm以下）の黄色軽石多量、透成土）
 6. 黒褐色シルト（5mm以下）の黄色軽石4層より多い）
 7. 霧島御池軽石
 8. 黒褐色シルト
 9. 黒褐色シルト
 10. 鬼界アカホヤ火山灰
 11. 黄褐色シルト（5mm以下）の黄色軽石少量、透成土）
 12. 黄褐色シルト（5mm以下）の黄色軽石多量、透成土）
 13. にじみ、黒褐色シルト（5mm以下）の黄色軽石多量、透成土）
 14. にじみ、黒褐色シルト（3mm以下）の黄色軽石多量、透成土）
 15. にじみ、黒褐色シルト（3mm以下）の黄褐色軽石微量、透成土）

3T: 南壁



4T: 北壁



1 黃褐色土・黒褐色砂質土多量、透成土）

- 2 シラス・黄色軽石多量、オリーブ緑色砂質土（透成土）
- 3 黑褐色シルト（5mm以下）の黄色軽石多量、透成土）
- 4 黑褐色シルト（3mm以下）の黄色軽石を含む）
- 5 鬼界アカホヤ火山灰（4層中にブロック状入る）
- 6 黑褐色シルト（5mm以下）の黄色軽石多量）

図7. トレーナー土層・平面

5. 遺跡枠外（花木第3団地）

所在地 山之口町花木 2405-3

調査面積

12m² (再確認: 6m²)

調査原因 市営住宅

担当者

加賀淳一・外山亜紀子

調査期間 2018.5.16~17(再確認: 5.29)

調査後の措置

協議中

位置と環境 開発予定地は盆地の北東部、盆地東縁の山地帯（大谷山山地）とのふもとに広がる開析扇状地面（山之口扇状地）との境界域に位置している。山地帯の裾部に沿って北東・南西に細長く形成されたこの境界域は、丘陵地・シラス台地面・成層シラス台地面・河岸段丘面・谷地形が複合し、起伏に富んだ地形となっている。開発予定地は山之口運動公園の南東側、北から南へゆるく下るシラス台地面に立地している。現況は花木第3団地である。

周辺域では東に一段下る峯元第1遺跡にて、縄文時代晚期の住居跡などが確認されている¹¹。

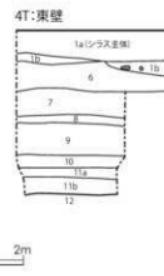
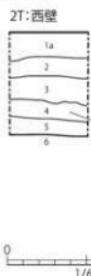
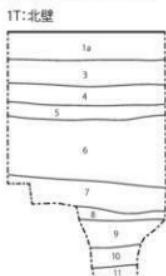
調査の結果 確認調査・再確認調査合わせてトレント4箇所を設定し、重機・人力で掘り下げて地下の状況を確認した。

基本的な層序は造成土(1・2層)、旧表土(3層)、黒褐色土(4層)、霧島御池軽石(5・6層)、黒色土(7層)、鬼界アカホヤ火山灰(8・9層)、黒褐色土(10層)、桜島11テフラ濃集層(11a層)、にぶい黄褐色土(11b層)、褐灰色土(12層)となる。

2T・4Tより縄文時代後晩期の土器小片が数点出土したのみであり、他のトレントでは遺構・遺物は確認されなかつた。

以上の点より、2T周辺にのみ、密度の希薄な縄文時代の遺跡が存在する可能性が高いと判断した。また、この結果に基づき「山之口佐土原遺跡」（縄文／散布地）として新規登録した。

1) 都城市教育委員会、2018.『都城市内道路11』



- 1a 塗灰色砂質土（シラス・黄色軽石・礫混・造出土）
- 1b 黒色軽石主体の造底土（3回目・造出時）
- 2 霧島御池軽石シルト（白色・白色軽石ほとんどなく含む）
- 3 黒色粘質シルト（白色軽石ほとんどなく混ざる）
- 4 黒色土
- 5 黒色粘質シルト（10m以下の黄色軽石をまんべんなく含む）
- 6 霧島御池軽石
- 7 黒色粘質シルト
- 8 黒色土
- 9 鬼界アカホヤ火山灰
- 10 黒色粘質シルト
- 11a 桜島11テフラ濃集層（桜島11火山灰濃集層）
- 11b にぶい黄褐色粘質シルト
- 12 相模色粘質シルト

図3. トレント土層



6. 八幡城遺跡

所在地	五十町 1092 ほか	調査面積	38m ² (再確認・46m ²)
調査原因	宅地造成・個人住宅	担当者	原栄子・外山亜紀子
調査期間	2018.5.24~25 (再確認 6.12~13)	調査後の措置	工事立会

位置と環境 開発予定地は盆地南西部に広がる成層シラス台地面（養原台地）の南東端、開析谷に面した台地端部に立地している。谷を挟んだ北東側には中世城郭「都城」が形成されている。当該地は八幡城遺と瀬戸ノ上遺跡との境界域にある。瀬戸ノ上遺跡では2013～2017年の確認調査にて、2013・2016年度は近世溝状遺構と掘建柱建物跡、2017年度は開発予定地に隣接する南北方向の道路に平行する非常に大規模な中世溝状遺構を検出している。なお、この南北方向の道路は、位置関係から文化・文政年間の編纂資料「庄内地理志」の「五拾町村絵図」にある「道A」に推定され、近世期から続く道と考えられる。本開発では補助事業にて確認調査を実施したほか、市単独予算にて再確認調査、工事立会を実施した。再確認調査・工事立会共に本遺跡の理解のために必要な情報であるため、本項にて併せて報告する。

調査の結果 トレンチ9箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げて地下の状況を確認した。層序は表土(1層)、桜島文明軽石(2層)、黒色土(3層)、黒褐色土(4層)、霧島御池軽石(5・6層)、黒色土(7層)、鬼界アカホヤ火山灰(8・9層)、黒色土(10・11層)、黒褐色土(12・13層)となる。

確認調査では、1Tで近世以降の溝状遺構・ピット、4Tにてピット、7Tで近世以降と考えられる硬化面、8T・9Tにて溝状遺構を検出した。遺物は2T・3層にて中世土器片、近世捕鉢等が出土している。再確認調査トレンチは1T・7T・2Tの間に設定した。南北にのびる溝状遺構(SD1)、ピットを検出した。



図1. 調査区位置



図2. トレンチ配置

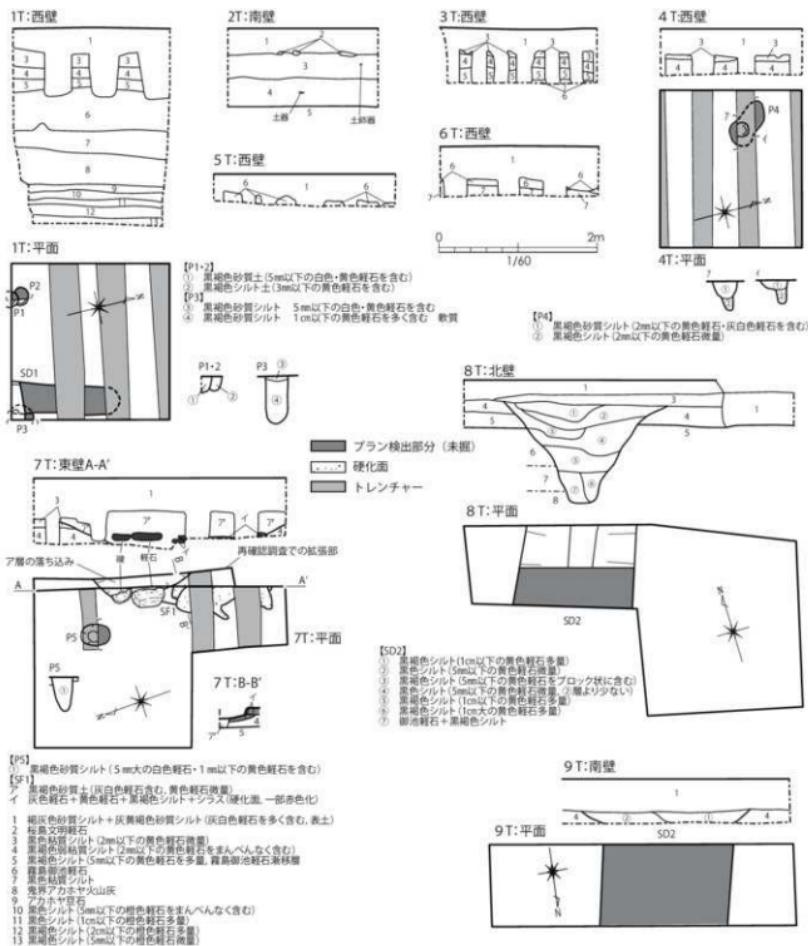


図4. 確認調査トレンチ土層・平面

SD1からは18世紀代の薩摩焼碗底部や擂鉢が出土した。以上の結果より、開発予定地には中世・近世の遺跡が存在する可能性が高いと判断した。

工事立会は①8月21日、②10月25・26日、③平成31年2月12日に行った。①・②では遺構を確認したため、工事を一時中断し、調査・記録を実施した。①では底面に硬化面をもつ不整形状の落ち込み(SX2)、②では直角に屈曲する浅い溝状遺構(SD1)、東西方向の溝状遺構(SD3)、ピット等を検出した。SD1は位置関係より再確認調査SD1との接続が考えられる。SD3は一部が二段掘りとなる非常にしっかりとした溝状遺構であり、天目櫛(3)が出土した。P8・10・11・14は直列しており、柵列の可能性がある。P6から天目櫛(4)が出土した。③では掘削は表土中に留まり、遺構・遺物は確認されなかった。

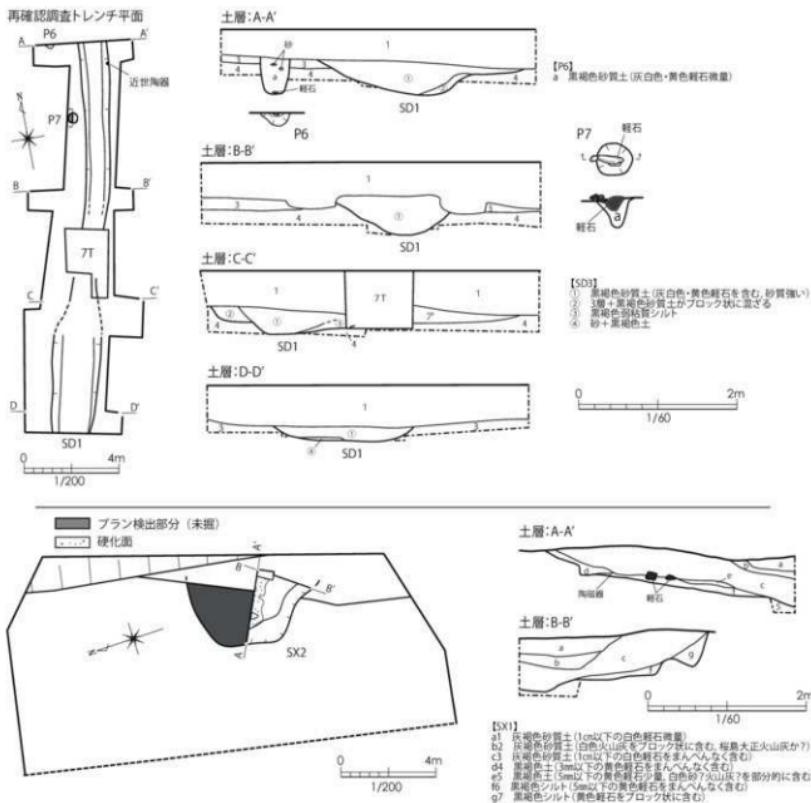


図4. 再確認調査・工事立会①トレンチ土層・平面



図版1. 五拾町村絵図(部分):庄内地理志(巻65)
(都城島津伝承館蔵)

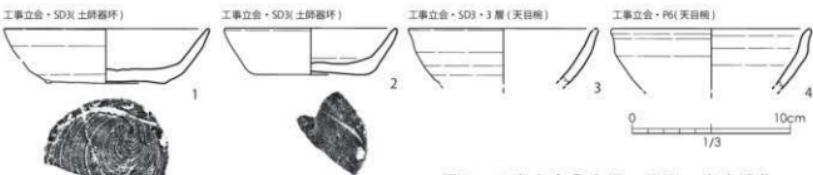
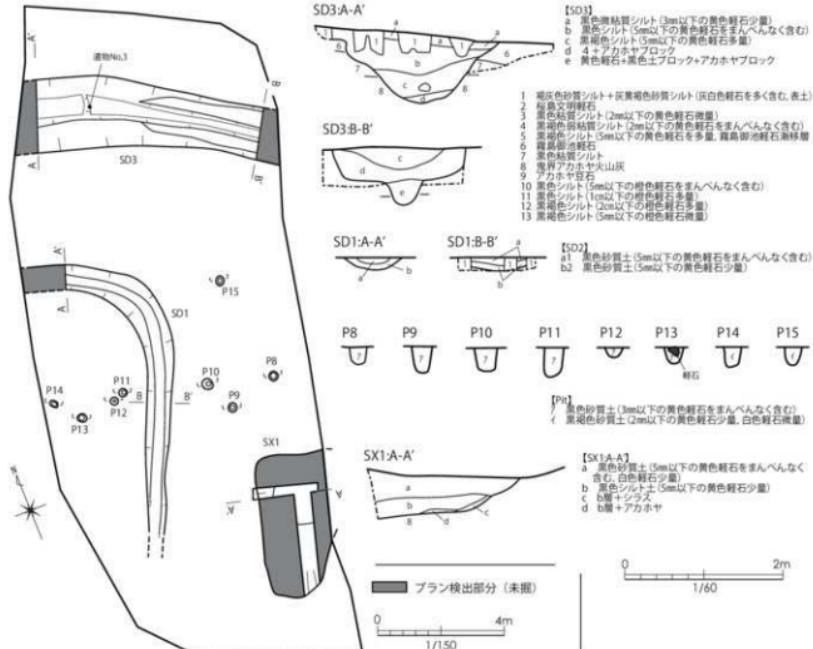


図5. 工事立会②土層・平面・出土遺物



図版3. 工事立会② (真上から・上が東)



図版4. 工事立会②: SD2 (西から)

7. 白拍子遺跡

所在地 郡元町 2688-3 ほか
調査原因 不動産鑑定
調査期間 2018.8.1
調査面積 35m²

担当者 近沢恒典・原栄子・
下田代清海
調査後の措置 現状保存

位置と環境 開発予定地は盆地底南半に広がる開析扇状地面（一万城扇状地）の北縁部に位置している。周辺には非常に細い道と宅地・畠地があり組んでおり、近世以来の地割を残している。現況は畠地・宅地・竹林である。開発予定地の南に隣接する道路拡幅事業では、近世の道路状遺構と近世陶磁器類が確認されている。

調査の結果 トレンチ 8箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げて地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土（1層）、桜島文明軽石（2層）、黒色土（3層）、黒褐色土（4層）、霧島御池軽石（5・6層）となる。4～6層で遺構検出を行った。

2T・5T～7Tでは南北方向にのびる溝状遺構（SD1）を検出した。検出面での幅約1m、検出面からの深さ約0.8m。断面形は緩やかなU字形で東壁の方が傾斜がやや緩い。埋土上位には多量の桜島文明軽石（a層）が堆積していた。遺物は出土していないが、桜島文明軽石の堆積より、中世期の可能性が高いと考えた。5TではSD1と重複する東西方向にのびる溝状遺構（SD3）を検出した。近代遺物の出土と埋土に桜島大正火山灰（d層）を含む点より近代遺構とした。3Tでは幅約1.6m、深さ約1mの南北方向にのびる溝状遺構（SD2）を検出した。断面形は端正なV字形である。備前焼壺片が出土しており中世遺構と把握した。6T・7Tでは埋土中に白色粘土層を含む土坑を検出した。平面形は直径約1.2mの円形である。18世紀以降の薩摩焼が出土しており、近世遺構と考えられた。8Tでは幅約0.8m、深さ約0.4mの南東・北西方向にのびる溝状遺構（SD4）を検出した。遺物はなく、時期不明である。

以上の結果より、開発予定地には中央より東側を中心、中世から近代にかけての遺跡が存在している可能性が高いと判断した。



図版 1. 6T : SD1 (西から)



図 1. 調査区位置

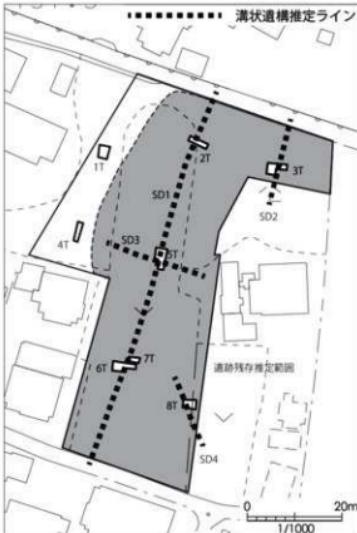


図 2. トレンチ配置

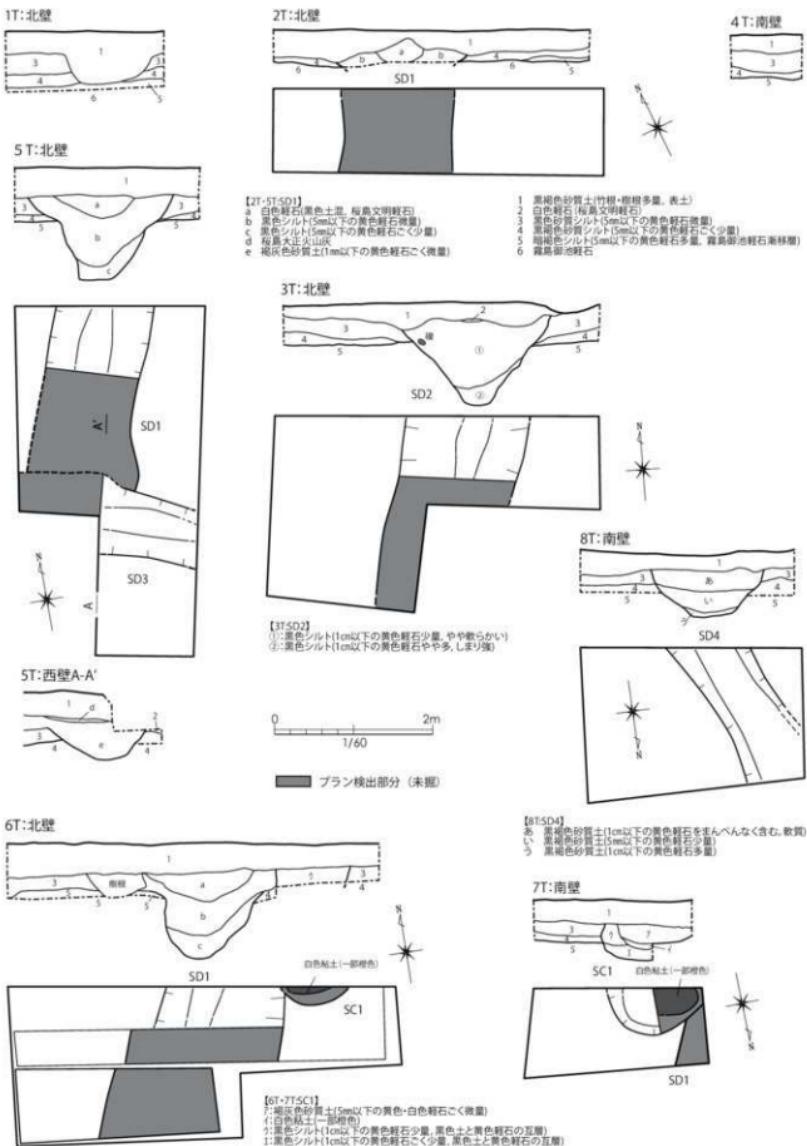


図 3. トレント土層・平面

8. 宮崎県指定史跡 高城町古墳（19号）

所在地 高城町有水 2833-2

担当者 乗畠光博・福添暁久・

調査原因 墳丘保全

加賀淳一・原栄子

調査期間 2018.8.16~24

調査後の措置 現状保存

調査面積 24m²

位置と環境 開発予定地は盆地の北東部、大淀川左岸に展開するシラス台地・成層シラス台地群内（田辺・有水台地群）に位置し、有水川を見下ろす標高約143mの尾根状地形の南端頂部付近に立地している。北・東側は成層シラス台地面が続き緩やかに北へ下るが、西・南側は大きく下り、有水川沿いの河岸段丘面に接続する。1935年7月2日に円墳として宮崎県指定史跡となった。現在は烟・宅地・進入路・市道によって周囲を削られ、いびつな平面形となっている。周辺には西に少し下った面に県指定古墳（20号）が立地している。

調査の結果 今回の調査は、民家への進入路に面している古墳法面の崩落防止を目的とした養生シート設置に起因する。調査の方法は、養生シート設置面の精査及び記録と周溝確認のためのトレーニング調査である。

トレーニングにおける層序は表土（1層）、霧島新燃享保輕石（2層）、周溝埋土（3～9層・5層：霧島高原スコリア）、SC1（10～12層）、墳丘盛土（15層）、黒色土（16層）、霧島御池輕石（17層）、黒色土（18層）となる。

ITで確認された周溝は、幅約5m、墳丘盛土最下層（15層）からの深さ約1mであった。断面形態は緩い弧状で、埋土上部には霧島火山起源の歴史時代のテフラ（5層）が堆積していた。周溝の西端部において、周溝から墳丘下へと続く黒色土の落ち込み（SC1）を検出した。位置と形状より、周溝端部から墳丘下に向けて構築された地下式横穴墓と考えられる。

墳丘は進入路の路面から墳丘面までが、高さ約2mのほぼ垂直な法面（壁面）となっている。法面の精査から、墳丘が霧島御池輕石（5層）上の黒色土層（3層）上面に構築されていることがわかる。墳丘形成土は3層起源と考えられる黒色弱粘質シルトが主体となるルーズな土（2層）であった。黄橙色輕



図1. 調査区位置



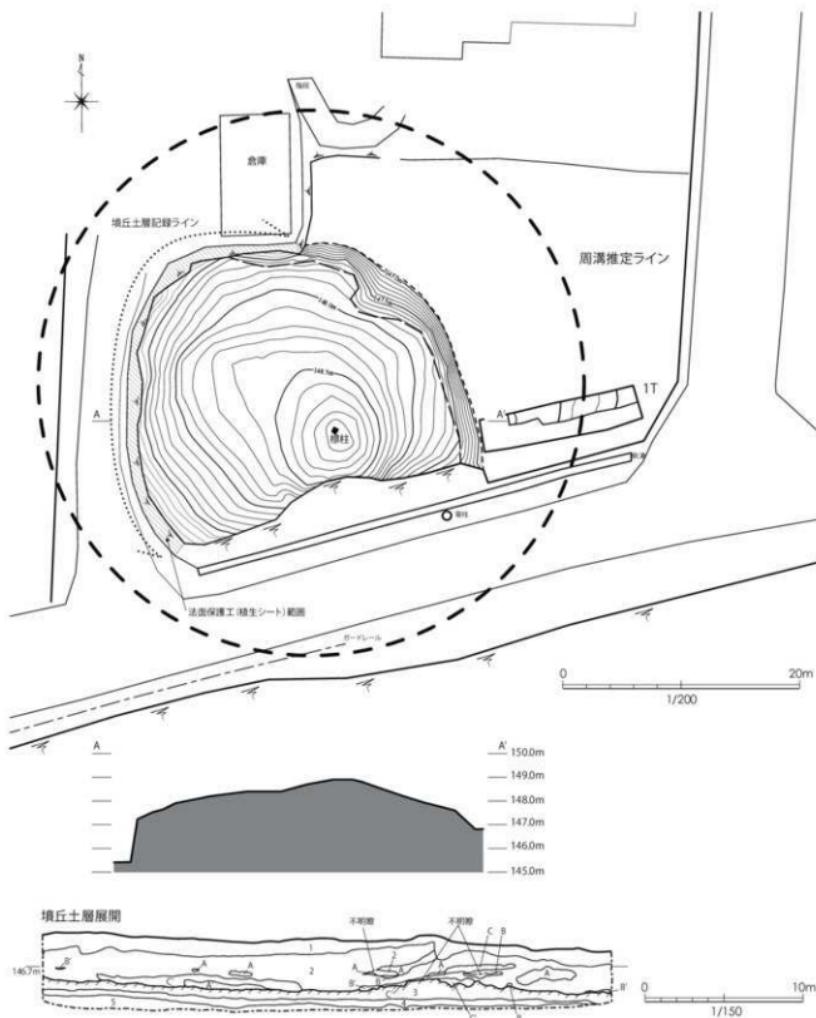
図2. トレーニング配置



図版1. 空中写真（真上から・上が北）



図版2. 周溝土層断面：(西から)



- 1 暗褐色～黒褐色砂質土 (3mm以下)の黄褐色軽石・5mm以下の礫含む。上面に1cm以下の浅黄色軽石と1cm以下の暗褐色入コリア粒敷在。全体的に植物根による擾乱が著しい。
 2 黒褐色砂質シルト (1cm以下)の黄褐色軽石含む。所々に2mm以下の中褐色軽石を含む箇所あり。上半部は植物による擾乱著しい。本來は小さな盛土ブロックの単位が存在するはずだが、堆積により擾乱のため把握が困難。
 3 黄褐色砂質シルト (1cm以下)の黄褐色軽石含む。
 4 黑褐色砂質シルト (1cm以下)の黄褐色軽石含む。
 5 2mm以下の中褐色軽石 (5mm以下)の角片→薄い直島貝殻を含む。
 A 黑褐色砂質シルト (2mm以下)の黄褐色軽石を2層より多く含む。粒が細っていない。
 B 黑褐色砂質シルト (2mm以下)の黄褐色軽石多量。
 C 2mm以下の中褐色軽石を主体。黒褐色砂質シルトを少量含む。
 ○ 固くしまる

図 3. 塗丘平面・断面・土層

石の含有量等により一部は細分できたが、植物擾乱等の影響が大きく盛土ブロックの単位を明確にすることはできなかった。3層と墳頂部との比高差と周溝円周復元より、径17m、高さ3m以上の墳形が推定された。遺物は須恵器片が周溝1層より1点出土し、5点をトレンチ周辺で表探した。1・4は胴部片で外面調整には平行タタキ(1・2)、格子目タタキ(3・4)があり、内面は丁寧なナデである。5・6は同一個体と考えられる頸部付近で、外面は格子目タタキを丁寧にナデ消している。TK216にあたると考えられる¹¹⁾。以上の点より、本古墳の形状としては、墳径17m、周溝幅5m、地下式横穴墓を伴う円墳が考えられた。また、出土状況が不安定ではあるが、遺物の時期は5世紀前半を示している。

1) 甲斐康大氏(延岡市教育委員会)の御教示による。

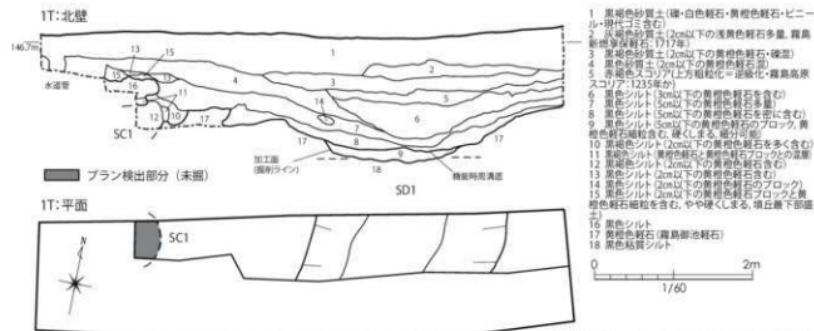


図4. トレンチ土層・平面

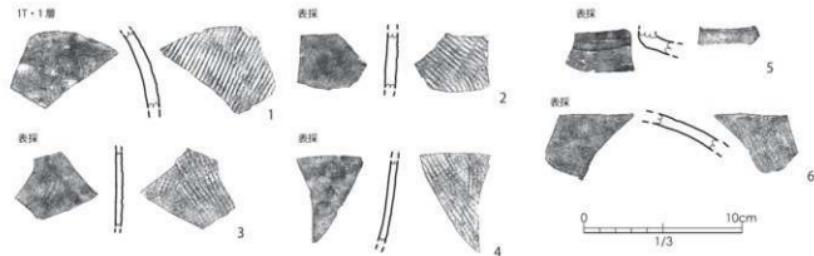


図5. 出土遺物



図版3. SC1(東から)



図版4. 墳丘土層(北西部)

9. 都城跡（中之城）

所在地 都島町 863-1 ほか
調査原因 不動産鑑定
調査期間 2018.9.11

調査面積 6m²
担当者 加賀淳一
調査後の措置 協議中

位置と環境 開発予定地は盆地底南西部に広がる成層シラス台地面（蓑原台地）の南東端に形成された中世城郭「都城」内に位置している。「都城」はシラス台地の端部を空堀によって分割し曲輪を構築した「群郭式城郭」^①であり、大淀川を背後にした本丸から西へと城域を展開させる。

開発予定地は中之城の北西端にあり、西側の外城との間に直線的な空堀「馬乗馬場」との境界付近と考えられる。中之城の曲輪内では、1972年に発掘調査、1996年・2005年に確認調査を実施している^{②・③}。1972年の調査では幅10m以上の規模な道路状遺構のほか、多数の建物跡、石組み列等を検出している。1996年の調査区は曲輪南端部にあたり、幅15mの掘状遺構と、それを版築で埋めて地上げしていく過程で構築された石壁を伴う石組み戸戸を検出している。

調査の結果 トレンチ1箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げて地下の状況を確認した。

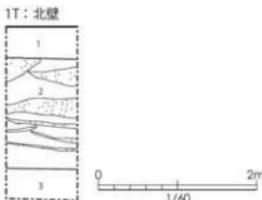
基本的な層序は表土（1層）、二次シラス（2層）、シラス（3層）となり、大規模な削平が認められた。遺構・遺物は確認されなかった。国土地理院の空中写真では、1948～1965年の間に地形が変化している様相がみてとれ、その期間中の破壊と考えられた。

以上の結果より、開発予定地に遺跡が存在する可能性は低いと判断した。

1) 八巻孝夫. 1991.「都之城について 繩張検討による現状把握」[平成2年度道路発掘調査概報]. 都城市教育委員会

2) 都城市教育委員会. 1983.「都城跡・中之城跡発掘調査」

3) 都城市. 2006.「都城跡」[都城市史 資料編 考古]



1 黒褐色粘質土+白色粘土+灰白色砂(埴生土)
2 白色砂+黄褐色粗石+白色粗石(互層状、シラス二次堆積)
3 シラス

図3. トレンチ土層

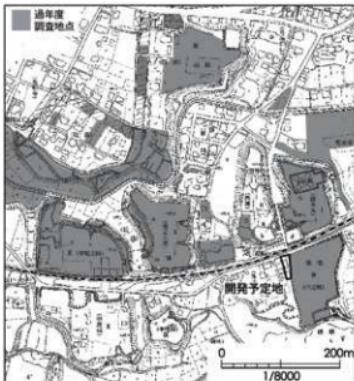


図1. 調査区位置（八巻 1991 に加筆）

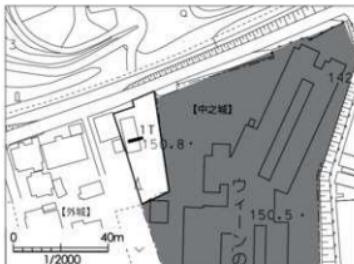


図2. トレンチ配置



図版1. 都城絵図（都城島津伝承館蔵）

10. 犬王遺跡

所在地 山之口町富吉 6483-2 ほか
 調査原因 煙地かんがい事業「高才第3地区」
 調査期間 2018.11.27

調査面積 24m²
 担当者 近沢恒典・下田代清海
 調査後の措置 協議中

位置と環境 開発予定地は盆地の東縁部、富吉川の上流域に形成される開析扇状地面(富吉扇状地)に位置している。今回の調査区は扇状地面の北東部にあり、西にのびる谷地形の谷頭部へと下る斜面の上位部分に立地している。周辺域では煙地かんがい事業に伴う一連の確認調査で、縄文・弥生・古代の遺跡を確認している。

調査の結果 トレンチ4箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げて地下の状況を確認した。

基本的な層序は耕作土(1層)、黒色土(4層)、褐色土(5層)、霧島御池輕石(6・7層)、黒色土(8層)、鬼界アカホヤ火山灰(9層)、黒色土(10層)、黒褐色～暗褐色(11層)、暗褐色土(12層)、褐色土(13層)となる。層番号は一連の調査における基本土層に従っているため、当該地においては欠如している層もある。

1Tでは7層上面にてピット2基(P1・2)を検出した。埋土中より古代土師器片が出土している。2Tでは4・5層より縄文土器片・古代土師器片が出土した。

以上の結果より、開発予定地の一部には縄文時代・古代の遺跡が存在する可能性が高いと判断した。



図1. 調査区位置

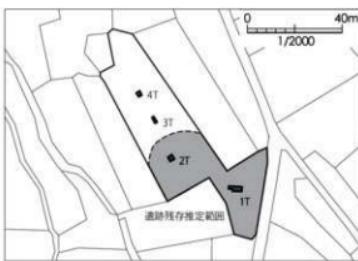


図2. トレンチ配置

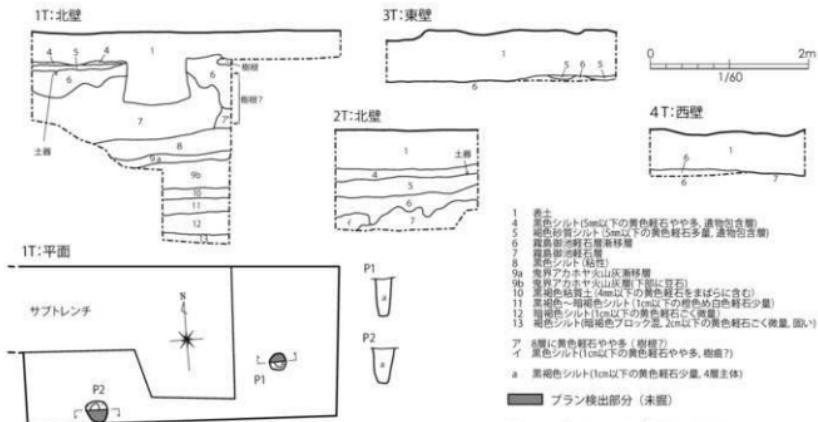


図3. トレンチ土層・平面

11. 遺跡枠外（下川東四丁目）

所在地 下川東四丁目 4037 ほか

担当者 近沢恒典・加賀淳一・

調査原因 公園造成

下田代清海

調査期間 2018.12.12~13

調査後の措置 協議中

調査面積 85m²

位置と環境 開発予定地は盆地のほぼ中央、大淀川・沖水川・横市川の合流点南東の河川氾濫原面に立地している。現況は水田である。東側の中尾下遺跡^①では、2008年の調査にて古代建物跡や近世水田が確認され、多量の古代遺物が出土している。

調査の結果 開発予定地にトレーンチ 15箇所を設定し、重機・人力で掘り下げて地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土(1層)、旧耕作土(2層)、造成土・洪水堆積(3・4層)、桜島文明軽石(5層)、黒色土(6層)、霧島御池軽石(7層)、黒色土(8層)、鬼界アカホヤ火山灰(9・10層)、黒褐色～黒色シルト(11・12層)、白色軽石(13層)、黒褐色～暗褐色シルト(14・15層)、砂・砂礫層(洪水堆積 a1 ~ a9 層)となる。

1 ~ 3T・5 ~ 10T・15T では、1層下が複数の砂層を挟む旧耕作土層・造成土層(2・3層)、砂礫層(a6層)となっていた。7T・3a層出土の近現代磁器片より、近現代以降に造成された耕作地と考えられる。

東側の4T・11 ~ 14Tでは、7層や10層等の台地的な堆積となる。中尾下遺跡と同様な河川氾濫原面の残丘地形と考えられる。土層断面からは東→西、北→南へ下る地形が推定される。11・12Tでは1層直下が上部を削平された7層となっていた。11Tの西側では大きな落ち込み(SX)を検出した。土層断面の観察では上位のSX1と下位のSX2に分けられ、SX1は埋土主体が2層であることより近現代以降の水田造構と考えられる。SX2は非常に深いV字状断面の大型溝状造構の可能性があるが、西側端が検出できていないため、詳細な形状・用途は不明である。4Tではラミナ状の砂の混じる洪水堆積と造成土層(4・6層)より多量の古代・中世の遺物が出土した。13Tでは5層に覆われた中世水田跡を検出した。その下は古代遺物を多量に含む黒色土層(6層)となる。4Tと同様、一部にラミナ状の砂の堆積があり洪水の影響が想定される。14Tではa6層の下が中世遺物を含む造成土層(4層)となっていた。



図1. 調査区位置



図2. トレーンチ配置

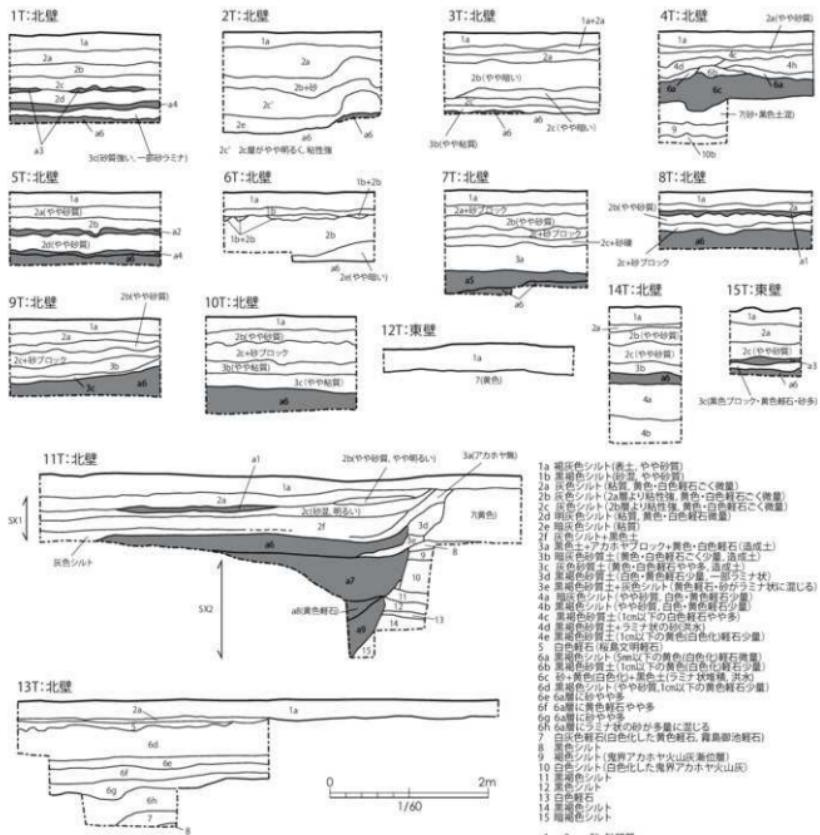


図3. トレンチ土層

以上の点より、開発予定地の大部分は近現代以降に水田化が進められた区域と考えられ、東側の残丘面については頂部の削平が進むものの、周囲の氾濫原面に下る部分においては、古代～中世遺物包含層及び中世水田を主体とする遺跡が存在する可能性が高いと判断した。

また、この試掘結果に基づき遺跡残存推定範囲を「中尾下第2遺跡」(古代・中世/散布地・生産遺跡)として登録した。

1) 都市教育委員会. 2010. 「中尾下遺跡」



図版1. 11T: SX1・2 (南から)

12. 遺跡枠外（都城西飛行場跡）

所在地 都原町 7427
 調査原因 道路改良（市道・鷹尾都原線）
 調査期間 2018.12.25

調査面積 6m²
 担当者 加賀淳一・外山亞紀子
 調査後の措置 協議中

位置と環境 開発予定地は盆地南西部に広がる成層シラス台地面（褒原台地）に立地する。現況は宮崎県立さくら聴覚支援学校である。周辺域は都城西飛行場の建物群推定域にあたる。都城西飛行場は1942年に通信省管轄の航空機乗員養成所として開設され、1944年に陸軍に接収された。1945年4月からは沖縄への特攻機が出撃したが、米軍の空襲も激化し、ほどなく使用不能となっている¹⁾。

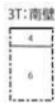
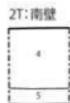
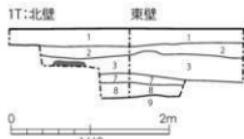
調査の結果 トレント3箇所を設定し、重機・人力で掘下げて地下の状況を確認した。

基本的な層序は、表土（1層）、造成土（2～6層）、黒褐色土（7層）、霧島御池軽石（8・9層）となる。

いずれのトレントでも厚い造成土が堆積しており、造成土中からは、近現代陶磁器、ガラス瓶、コンクリート片等が出土した。近代～現代（戦後）の遺物が混在しており、戦時中の造成土と特定可能な層は確認できなかった。遺構は検出されていない。

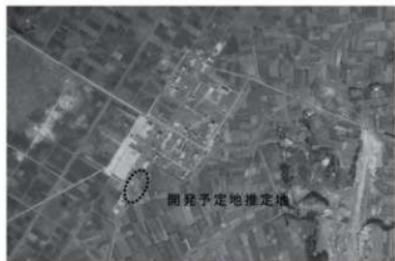
以上の点より、開発予定地において、都城西飛行場関連遺構を含め、遺跡が存在する可能性は低いと判断した。

1) 都城市、2006.『都城市史 通史編 近現代』



- 1 シラス+礫(表土)
- 2 黒褐色土+白色・青色軽石ブロック(固くしまる、造成土)
- 3 黒褐色土+白色・白色軽石(コンクリート片混、造成土)
- 4 黑褐色土(ガラス瓶・陶磁器・灰混、造成土)
- 5 黑褐色土質(造成土か)
- 6 リサイクル
- 7 黒褐色土(御池軽石層移層)
- 8 黒褐色土(御池軽石層)
- 9 霧島御池軽石

図3. トレント土層



図版1. 1948年空中写真（国土地理院）



図版2. 1T（西から）

13. 郡元西原遺跡範囲確認調査

所在地 郡元町 3337 ほか
調査原因 遺跡範囲確認
調査期間 2018.10.29~12.25

調査面積 113m²
担当者 近沢恒典・下田代清海

位置と環境 郡元西原遺跡は盆地底南半に広がる開析扇状地面（一万城扇状地）に立地する。現況は平坦な宅地である。本遺跡の所在する郡元町は、万寿年間（1024～28）の成立とされる島津荘の成立拠点域と推定される地域である。

本範囲確認調査は、道路事業に伴い 2016 年度上半期に実施した郡元西原遺跡（第 2 次調査）¹⁾で検出した大型溝状遺構（大溝・SD1）に起因する。この大溝は幅約 4 m、検出面からの深さ約 2 m、断面形は端正な逆台形、平面形は調査区内でほぼ 90°屈曲し、屈曲部から北北東（以下、南北ラインと記載）、南東南（以下、東西ラインと記載）の両方向へとのびる。周囲の歴史的環境を考慮すると、東側を区画内とする大規模な囲繞施設の可能性と共に、島津荘の現地経営にかかる性格を有する可能性も想起され、大溝の範囲及び東側（区画内）の状況確認を目的とする範囲確認調査を 2016 年下半期より継続的に実施することとなった。2017 年度までの調査にて、大溝南北ラインでは 25 m までの存在、東西ラインでは 54 m での終端を確認し、東側では小規模なピットや溝状遺構を検出している。

2018 年度は大溝東端部形状と東への延伸の可能性、

北への延伸長、北・東縁の区画施設、区画内の状況の確認を目的に 13 箇所のトレーニングを設定した。重機で表土を除去したのち、人力で掘り下げて地下の状況を確認した。

調査の結果 基本的な層序は表土（1 層）、旧耕作土（2 层）、黒色土（3・4 层）、霧島御池軽石（5・6 层）、黒色土（7 层）、鬼界アカホヤ火山灰（8・9 层）となる。

1T は大溝（SD1）の東への延伸の確認を目的に設定した。1 m 以上の厚い造成土・旧耕作土の堆積があり、その下は上位を削平された 6 层となっていた。遺構・遺物は確認されなかった。土層堆積状況からは、大溝等が在する地形面よりも一段低く、南の開析谷に向かって下る旧地形が考えられた。

2T は大溝東端部形状確認を目的に 2016-5T・11T、2017-3T の間に設定した。大溝端部の平面形は、検出面では幅 2.5 m（2016-11T の大溝南端部から計測）の隅丸方形、底面は幅 1 m 以上の方形と推測された。壁面は約 45°と急角度で立ち上がり、丁寧に整形される。従前の調査より溝埋土は、最下部の①黄色軽石と黒色シルト互層（n・o 層）、その上の②レンズ状堆積の青灰色火山灰と③黄色軽石や鬼界アカホヤ火山灰をブロック状に含む黒色土層（k・m 層）に大別され、①は溝開放時の流入土、③は人為的な埋め戻し土、②は 12～13 世紀噴出の火山灰（霧島御鉢起源）の可能性が指摘される²⁾。今回の調査では②は観察できなかったが、①・③の状況は以前の調査と整合する。また、k 層において多数の硬化層ブロックが混じる点（kla 層ほか）も他の地点と共通しており、k 層による埋め戻しの過程において、複数回の硬化面の形成と掘り直しがなされた結果と考えられた。遺物は埋土上位より白磁碗（1）、東播系須恵器（2・3）、土師器小片等が出土した。1 は 11 世紀後半から 12 世紀前半²⁾の時期が考えられる。2 は豐口縁部で外面に斜行する平行タキのちナデ調整を施す。3 は片口鉢片で体部は直線的に開き、口縁部は断面を方形状に仕上げる。2・3 共に 12 世紀代³⁾と考えられる。SD1 と SD2 との接点付近では不整形の落

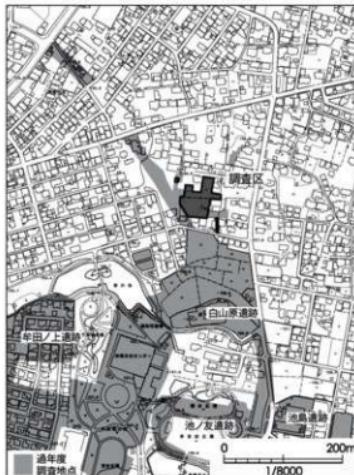




図2. トレンチ及びレーダー探査位置

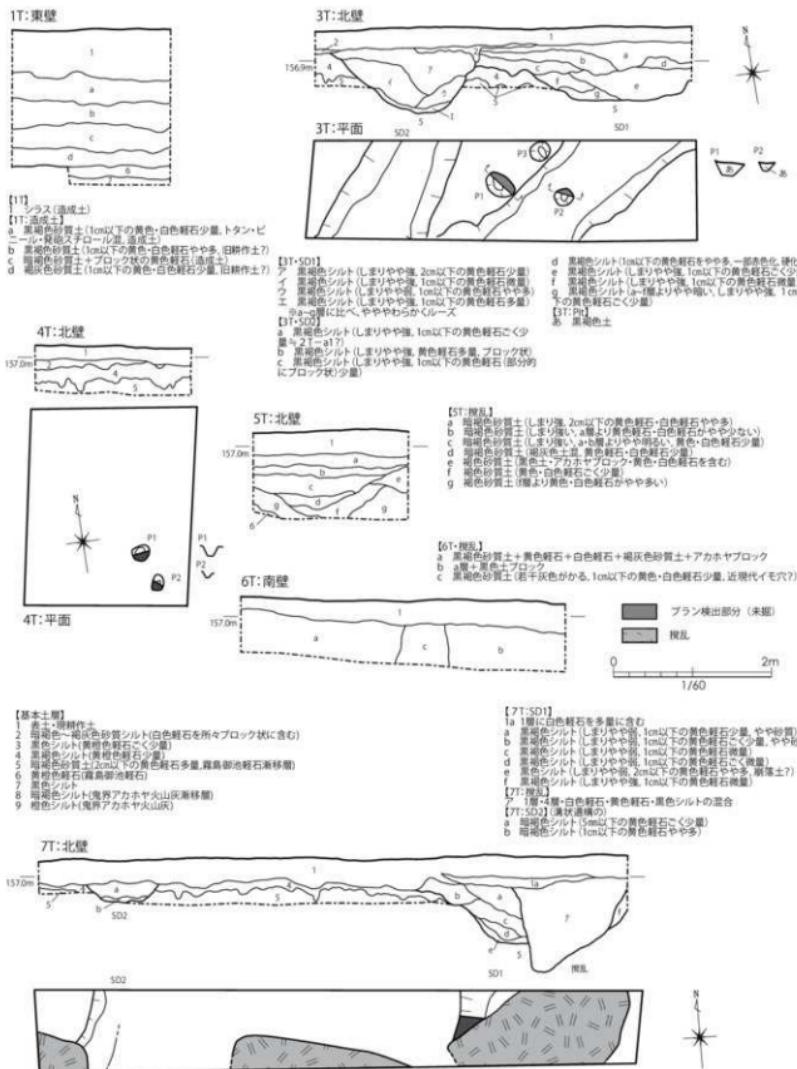


図 3. トレンチ土層・平面. 1

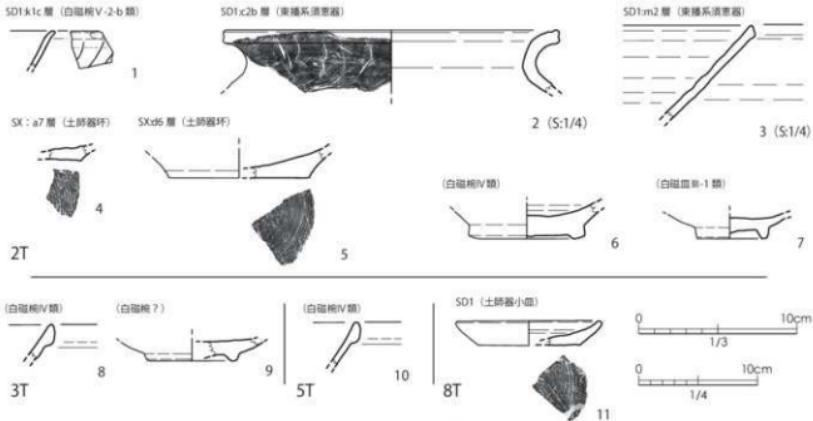


図4. 出土遺物

ち込みを多数検出した。2017-3Tの同位置でも同様な落ち込みを検出しており、SD1に下る段状遺構を考えたが、今回の調査で不整形の落ち込みが広がる点と土層断面に生物擾乱(a5層)が認められたため、植物等の生物擾乱の可能性が高いと考えられた。

SD2-7は小型の溝状遺構である。SD2は長軸が南北方向の直線的な溝状遺構である。台形状の断面で検出面からの深さは約50cmである。SF1・SX1等と重複しており、土層堆積よりSD2→SF1→C層(SF1上の造成土層)→SX1・SD7と考えられる。SF1は長軸が北東・南西の硬化面であり。SD2からSD1の埋土上部(i層)に部分的に残る。SX2はSD2の底面から東壁にかけて形成された横穴状の掘り込みである。用途は不明である。埋土はSD2よりやや黒味の強い黒色～黒褐色土で、内部より土師器環片1点(5)が出土した。5は环底部で糸切離しである。復元底径が約8cm、口縁部にかけて大きく聞く器形と考えられ、12世紀～13世紀前半の時期が考えられる⁶。SD7は大溝付近においてSD2と直交する溝状遺構である。土層断面にてb層として観察できるが、平面形は記録できていない。SD2は大溝の埋土上部においてSD7等によって大きな影響を受けており、関係が明確でないが、平面配置からは2017-3T・SD9、南の2016-11T・SF1東側の溝状遺構へ接続も考えられる。

SD3-6はトレンチ北部で検出した。逆台形断面と考えられるSD4・6と浅い弧状断面のSD5・3に大別される。土層堆積からはSD3・4→5→6という先後関係が考えられた。

3T・6T-9Tは区画東縁・北縁の確認を目的に設定した。擾乱の影響が大きな5Tを除く各トレンチにて、従前の調査で検出した溝状遺構との接続が考えられる溝状遺構(①3T・SD1～2016-14T・SD2～6T・SD1、②8T・SD1～2016-9T・SD1～9T・SD1)を検出した。①・②共に逆台形断面のしっかりとした溝状遺構である。①では2016-14T・SD2から大溝の年代観と近い11世紀末～12世紀初頭の土師器が出土している。②は2T・SD2と合わせ、区画東縁の可能性も考えられたが、大溝との関係を明確にできなかった。

4T・5T・10T・12T・13Tは内部空間の様相の把握を目的に設定した。4Tで時期不明のピット、10Tで多数のピットと溝状遺構、13Tで浅い溝状遺構(SD1)を検出した。10Tで検出した遺構は、埋土の砂質が強く灰褐色土が混ざる点と近世陶磁器の出土より、いずれも近世遺構と考えられた。13T・SD1は長軸が東西方向の浅い溝状遺構である。埋土中より12世紀末～13世紀前半と考えられる土師器小皿⁴が出土しているが、埋土が近世遺構に近い点より混在の可能性もある。

11Tは大溝の南北ラインの北限の確認を目的に設定した。大きな擾乱を受けていたが、検出面からの深さ70cmの溝状遺構と考えられる掘り込みを検出した。大溝と比較した場合、非常に浅いが、南北ラインは北上するにつれて規模の縮小が観察されており、大溝の延長の可能性が高いと考える。

調査のまとめ 今回の調査では大溝東端部の形状を把握したほか、南北ラインでは43mまでの延伸

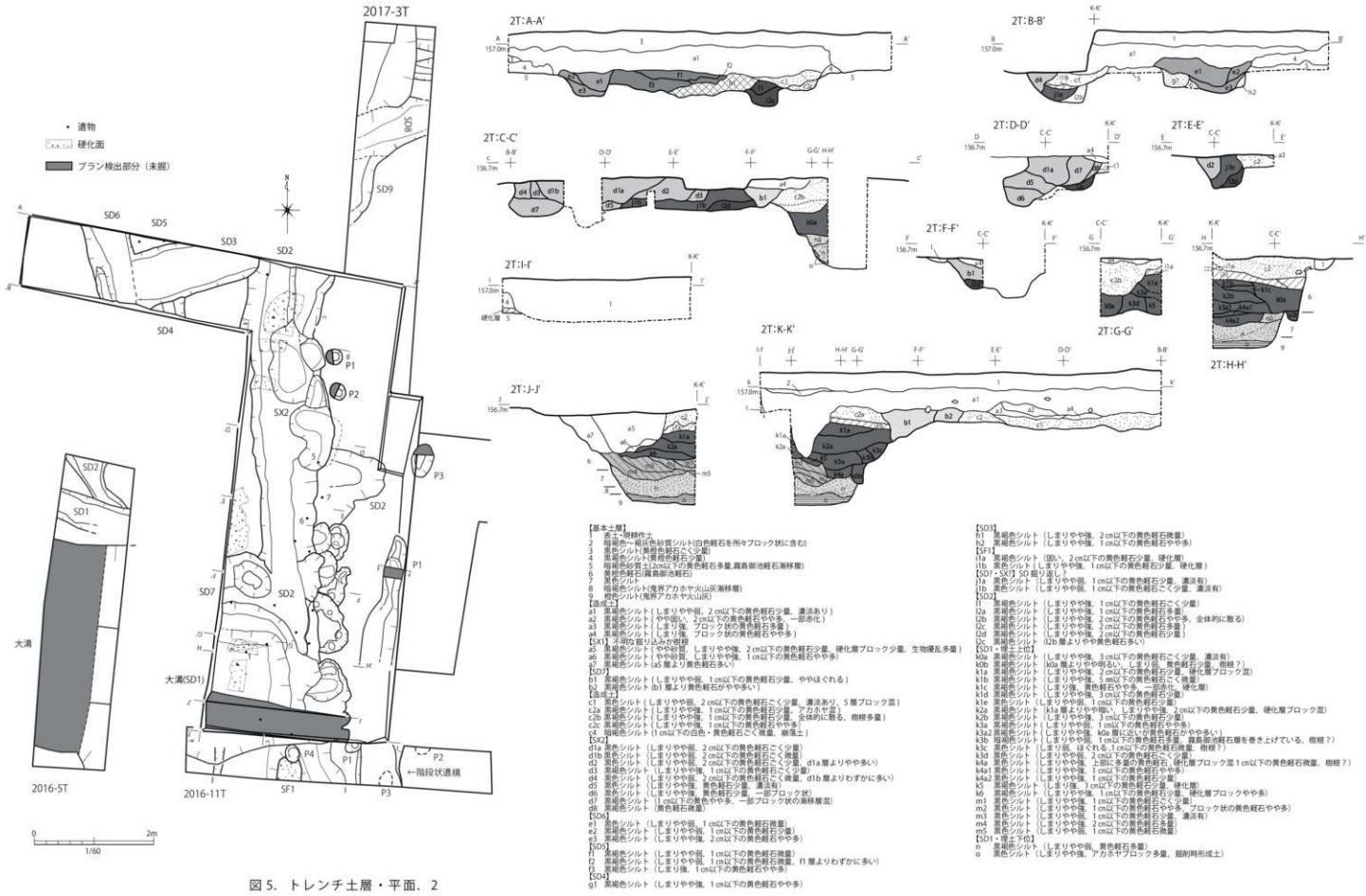


図5. トレンチ土層・平面. 2

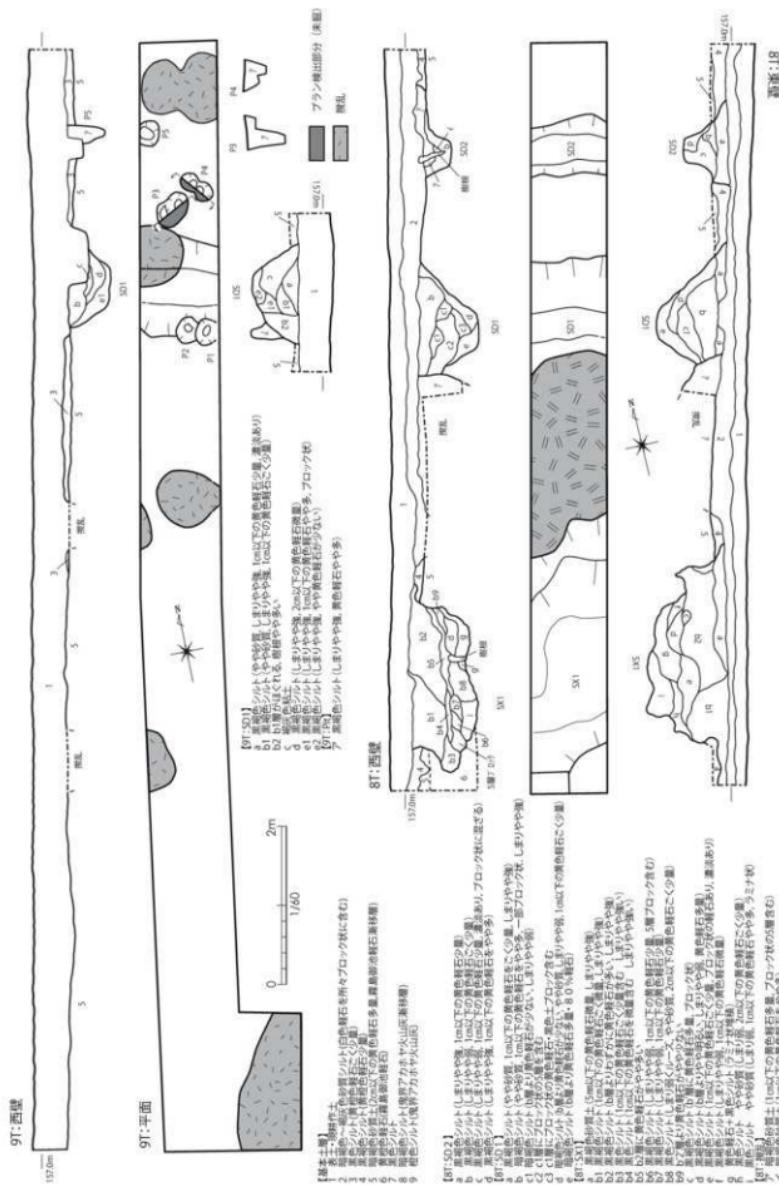


図7. レンチ主層・平面.

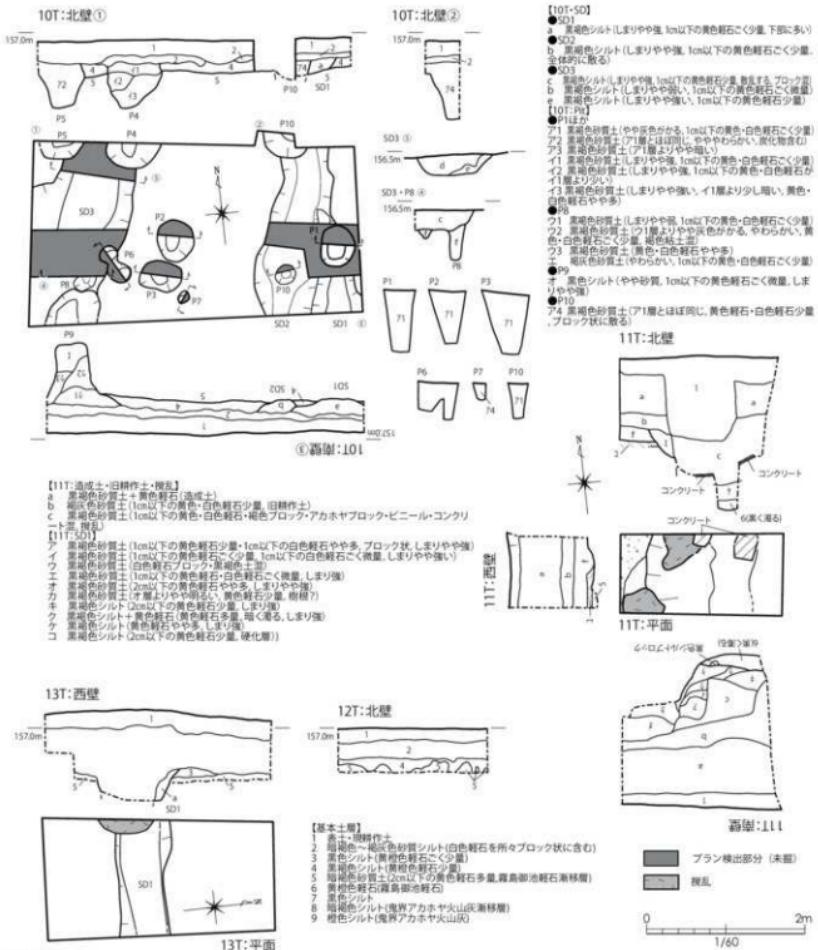


図6. トレンチ土層・平面. 3

を確認した。東・北部の区画施設は小型の溝状遺構が配置される点とその時期が大溝に近い点は確認できたが、直接的な関係はみいだせなかた。内部施設については、時期不明のピット、近世遺構を検出したのみであり、遺物量もごくわずかであった。従前の調査結果を合わせると大溝東端部付近に溝状遺構が集中する傾向と区画内における遺構・遺物の疎薄性がうかがわれる。

- 1) 都市域教育委員会。2018。「都元西原遺跡（第2次調査）」
 - 2) 太宰府市教育委員会。2000。「『宰府桑功跡XV・陶器分類編』」
 - 3) 松田稔。1995。「8.中世須恵器」。概説 中世の土器・陶磁器。真岡社
 - 4) 萩焼光博。2004。「都城盆地における中世土器の編年に関する基礎的研究」。『宮崎考古』。19。



図版 1. 調査区（直上から・上が北）



図版 2. 2T（北から）



図版 3. 2T : SD1・2（南東から）



図版 4. 2T : SD1・2（東から）



図版 5. 2T : SD1／南・西壁土層



図版 6. 2T : SD2～5・北壁土層



図版 7. 3T（西から）



図版 8. 4T : SD1・搅乱（南から）



図版 9. 8T : SD1 (東から)



図版 10. 8T : SD2 (南東から)



図版 11. 8T : SX1 (北西から)



図版 12. 9T : SD1 (南西から)



図版 13. 10T (直上から・上が北)



図版 14. 11T (南西から)



図版 15. 11T : 南壁土層



図版 16. 重機使用状況

14. 切畠第3遺跡

所在地 美川町（下川内 639 号線）
 調査原因 市道新設
 調査期間 1991.7.16~20

遺物発見 1992.4.2
 調査面積 9m²
 担当者 横山哲英・矢部喜多夫

位置と環境 開発予定地は盆地北西部、霧島火山群から続く山地帯の縁辺部に位置し、庄内川右岸に形成されたシラス台地面（溝の口丘陵）に立地する。周囲の低地面との比高差は約 30 m である。周辺域は庄内川を遡り、霧島山麓を抜け鹿児島湾地域へ至るルート沿いにあたり、霧島信仰に関する寺社が点在する地域である¹¹。なお、本事業では工事中に青花磁器瓶が発見された。出土状況を本項にて併せて報告する。

調査の結果 丘陵北端の緩傾斜地にトレーナー 1 箇所を設定し、人力で掘下げて地下の状況を確認した。

層序は、耕作土（1 層）、茶褐色土（2 層）、霧島御池軽石（3 層）、明褐色粘質土（4 層）、鬼界アカホヤ火山灰（5 層）、霧島牛のすね火成灰（6 層）、暗黄色土（7 層）、明赤褐色土（8 層）、明赤褐色土（9 層）、緑褐色土（10 層）、暗緑褐色土（11 層）、暗緑灰色土（12 層）となる。

7・8 層中より若干の礫が出土したほかは、遺構・遺物は確認されなかった。これらの状況より、開発予定地に遺跡が存在する可能性は低いと判断した。

青花磁器瓶 1992 年 2 月 3 日、道路工事に伴う抜根整地作業中に工事関係者によって発見された。発見地点は丘陵の東縁辺部（標高 202.4 m 付近）にあたり、

IT：西壁

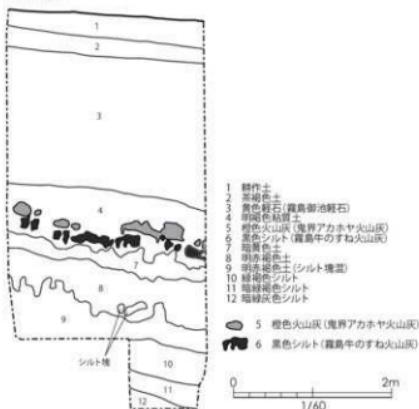


図 3. トレーナー土層

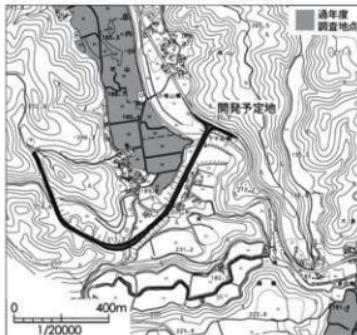


図 1. 調査区位置



図 2. トレーナー配置



図版 1. トレーナー土層（3 層より下）

丘陵上の平坦面から東側の崖面に向けて下る緩斜面(勾配約5%)²⁾である。青花磁器瓶2とともに白磁仏花瓶1、砂岩製石塔1が発見されたと記録されている。詳細な状況は不明である。また、工事関係者より市文化課(当時)に連絡があり、文化課職員によって発見地点付近の状況と発見資料の確認が行われている(日時不明)。2月5日に事業者等によるお祓いがなされたあと、近隣の千足神社に仮保管され、3月13日より都城市立図書館3階の市文化財収蔵庫(当時)で保管されることとなった。その後、4月20日付け都教文第30号で都城警察署長に埋蔵物発見届が提出され、4月30日付け108-11-10で宮崎県教育長より埋蔵文化財に認定された。また、発見地点付近は周知の埋蔵文化財包蔵地「切畠第3遺跡」として登録された。

青花磁器瓶は2点1対とされる。**1**は口径4.9cm、底径10.75cm、器高27cm、胴部最大径14cm。**2**は口径4.65cm、底径10.7cm、器高26.6cm、胴部最大径14.4cm。どちらも口縁部の一部を打ち欠く。底部は上げて底で胴上半は胴接ぎ成形である。肩部に蓮弁文で囲んだ唐草文と雲芝文(如意頭文)、胴部に宝相華唐草文、裾に簡略した蓮弁文をあしらう。景徳鎮窯で15世紀後半の時期が考えられている。白磁仏花瓶は近世以降のものである。石塔は略三角柱状で現状高70.5cm、上辺幅19cm、厚さ18.8cm、下辺幅30cm、厚さ23cm。表面右に「天正十七(1589)丑年七月□」、中央に月輪と「丑」、「徳叟□(宗力)雲禪定門」、左に「大連□(忌力)辰建立」の銘文がある。現在は千足神社境内に移設されている^{3),4)}。

2個対の完形青花磁器瓶である点、陶器供献の様相を示す資料とされる点より、2016年8月19日、「青花磁器瓶1対 附石塔1基」として都城市指定有形文化財に指定された。

- 1) 梁山葉子、2017、「切畠第3遺跡の青花磁器瓶について」『貿易陶磁研究』No.37
- 2) 1.事前現況測量時ににおける発見地点付近の等高線 202~203m間の距離 20mより算出。
- 3) 都城市、2006、「都城市史 資料編 考古」

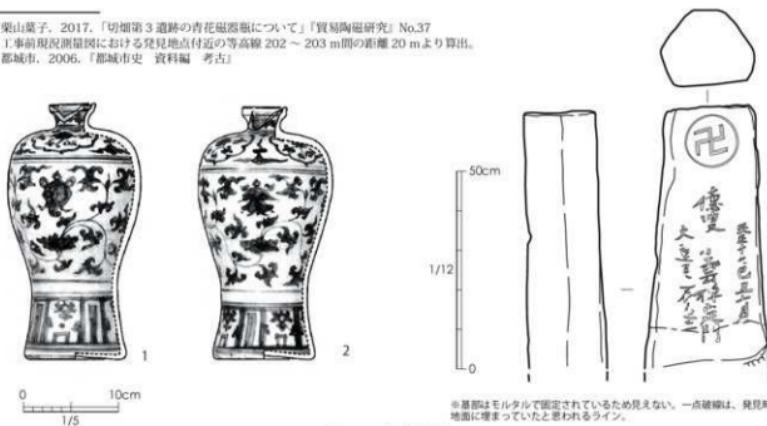


図4. 出土遺物



図版2. 発見地点(南東から)



図版3. 発見時保管状況

報告書抄録

ぶりがな	みやこのじょうしないいせき	12			
書名	都城市内遺跡 12				
翻訳名					
巻次					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書				
シリーズ番号	第 141 集				
編著者名	近沢恒典 (編)				
編集機関	都城市教育委員会事務局文化財課				
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町 19-1-16 郵便番号 885-0034				
発行年月日	2019 年 3 月 25 日				
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
下長坂城ヶ尾遺跡	下長坂町 703	31.705299 131.062182	2018.4.5	1.4m ²	個人住宅
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
城郭跡・集落跡	古代		土器類		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
田谷・片川遺跡	南筑前町 4045-1 ほか	31.746121 131.03505	2018.4.24	43m ²	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
集落跡	弥生	圓溝状遺構	先史土器		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(水木地区)民館	太郎山町 1840-2	31.7776 131.089774	2018.4.27	4m ²	その他建物(公民館)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
遺跡幹外	なし	なし	なし		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(山之内地区)民館	上水波町 1536 ほか	31.807842 131.094903	2018.4.27	26m ²	その他建物(公民館)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
遺跡幹外	なし	なし	なし		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(山之内地区)民館	庄内町 12651-1 ほか	31.771758 131.019217	2018.11.26-30	12m ²	その他建物(公民館)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
遺跡幹外	なし	なし	なし		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(北本第 3 地帶)	山之内町 花木 2405-3	31.785612 131.156698	2018.5.16 ~ 17	12m ²	市営住宅
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
遺跡幹外	調査	なし	調査土器片		新規: 山之内町原遺跡
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
八幡城遺跡	五十町 1092 ほか	31.712924 131.044394	2018.5.24 ~ 25	38m ²	宅地造成・個人住宅
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
遺跡幹外	なし	なし	なし		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(北本第 3 地帶)	山之内町 花木 2405-3	31.785612 131.156698	2018.5.16 ~ 17	12m ²	市営住宅
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
遺跡幹外	なし	なし	なし		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
白柏子遺跡	郡元町 2688-3 ほか	31.745281 131.097644	2018.8.1 ~ 3	35m ²	その他発見(不動産鑑定)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
散布地	中世・近世	溝状遺構	近世陶器片		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
白柏子遺跡	郡元町 2688-3 ほか	31.745281 131.097644	2018.8.1 ~ 3	35m ²	その他発見(不動産鑑定)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
散布地	中世・近世	溝状遺構	近世陶器片		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
真城 19 号墳	高城町 有水 2833-2	31.855964 131.128684	2018.8.16 ~ 24	24m ²	墳頂保全
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
古墳	古墳	古墳・周溝	須恵器片		古墳群指定史跡
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
郡城跡(中之城)	郡島町 863-1 ほか	31.714913 131.049930	2018.9.11	6m ²	その他発見(不動産鑑定)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
城郭跡・集落跡	なし	なし	なし		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
犬王遺跡	山之内町 宮古 6483-2 ほか	31.756236 131.144732	2018.11.27	24m ²	島易基盤整備事業(整地かんかい事業)
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
散布地	調査・古代	柱穴	調査土器片・古代土器片		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(下川東四丁目)	下川東四丁目 4037 ほか	31.748403 131.069312	12/12-13	85m ²	公園
種別	主な時代	主な遺構			
遺跡幹外	古代・中世	水田跡	古代・中世土器片・古代楽器片		新規: 中世下第 2 道跡
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
道跡幹外(都城内側)(馬路)	都城町 7427	31.734072 131.043628	2018.12.25	6m ²	1608
種別	主な時代	主な遺構			
遺跡幹外	なし	なし	近現代陶磁器		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
郡元町道跡	郡元町 3337 ほか	31.741603 131.094474	2018.10.29-12.25	113m ²	道跡範囲確認
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
集落跡	古代・中世	大型溝状遺構・溝状遺構・柱穴	石器内・樂器系楽器片・古代・中世土器片		
所収遺跡名	所在地	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
切畠第 3 道跡	美川町	31.784637 130.981694	199.1.16-20	9m ²	道路
種別	主な時代	主な遺構			特記事項
その他の遺跡	中世	なし	なし		工事中に古墳組合発見

都城市文化財調査報告書 第141集

都城市内遺跡12

2019年3月25日

編集・発行 都城市教育委員会事務局 文化財課

宮崎県都城市菖蒲原町19-1-16

郵便885-0034 電話(0986)23-9547

印刷・製本 有限公司 五十市印刷

宮崎県都城市平塚町3140-1

郵便885-0085 電話(0986)26-8006



幸せ上々、みやこのじょう

日本一の美と達観、そっておさの自然と伝統。